

論文要旨

学位論文題目：近代フランスの食文化とガストロノミーをめぐる考察

—『美食のフランス』(1921-1928)を中心に—

氏名：梶谷 彩子

本論文は、産業の発展が頂点を迎え近代フランスにとって最も華やかな時代となったベル・エポックから、第一次世界大戦を経た 1920 年代までの食文化について検討したものである。この時期は 19 世紀以降パリで急速に発達した高級料理が栄華を極めた一方で、素朴な郷土料理の復権、そして郷土料理がフランス食文化の主要な要素の一つとして再評価される時代への移行期に当たっている。この変化を最もよく表す資料がガストロノミーの言説であり、これを読み解きながら社会的背景と照らして研究を行うことによって、対象とする時代における食と社会の影響関係を明らかにすることを目的とした。

第 1 章では「ガストロノミー」がいかなるものであり、食文化史においてどのような役割を果たしてきたのかを確認した。ガストロノミーの言説を著した人々は、基本的な生活行動であった食に対して早くから文化としての価値を見出し、人間に歓びをもたらすものであるとして、食卓でのルールやマナーを守り、旬の食材を用いた料理を囲むことを読者に推奨した。初期の段階では指導的な内容が多かったが、19 世紀末から 20 世紀にかけては逸話を語る傾向が強まり、各地方の名物にまつわるものを収録した言説が出現し始めた。この時の旗頭となったのが『ミシュランガイド』そして『美食のフランス』であった。

第 2 章では 19 世紀後半から 1920 年代のフランスの食のあり方をレストラン、産業の発展、ベル・エポック、第一次世界大戦という 4 つの点から検討した上で、大戦によって国としてのあり方を問い直す必要に迫られたことによる食文化の変容を明らかにした。第 3 章では、19 世紀後半から徐々に顕在化した「地方主義」(レジオナリズム)の食への影響を中心に『美食のフランス』がガストロノミーの言説として果たした役割を分析した。ベル・エポック期には国家として 1870 年の普仏戦争以来掲げてきた「ナショナリズム」を推進すべく、万国博覧会や教育改革などを通して各地方の多様性を認知させながら、フランスが一つの国家としてまとまっていく取り組みが様々な方向性で進められていた。「地方主義」は、当時のナショナリズムのあり方の一つであり、戦後経済の立て直しのために地域経済も見直す取り組みに加え、地方ごとに独自の文化を大切にしようとする取り組みも同時期に起こった。後者の「地方主義」は戦後の急速な近代化を単純に受容しようとする社会に一石を投じ、古き良き時代に培われた独自の文化への回帰を促した。食の分野においても「食の地方主義」が唱えられるようになり、キュルノンスキーを始めとする 20 世紀初頭の美食家たちは、丁寧に作られた郷土料理をじっくり味わうとともに、その良さを見直すべきであることを喧伝した。『美食のフランス』はその活動の代表的な著作であると同時に、「地方主義」の波に乗って各地方の郷土料理や名店を掘り起こした新しいガストロノミーの言説として位置づけることができる。反面この作品では、著者のキュルノンスキーとマルセル・ルフが近代産業の象徴の一つである自動車で各地を回ったという特徴がある。特に文化における地方主義は産業化に対し

て疑問を呈するものであったが、『美食のフランス』はこの点に囚われることなく発展の恩恵を受けたことで実現した新しい「旅」の形でもあった。

『美食のフランス』が20世紀を代表するガストロノミーの言説として認識された背景には、「地方主義」とは異なる新しい近代文化、すなわち「観光旅行」(ツーリズム)の流行、そしてツーリズムにおける言説である「旅行ガイドブック」の出現が大きく影響していたと考えられる。そこで第4章では観光旅行が余暇活動として人々に受容されるまでを追い、ガイドブックの需要が高まった背景を明らかにした上で、当時の旅行ガイドブックの記述分析と『美食のフランス』との比較を行なった。近代の旅行ガイドブックは旅の様々な場面で用いることができるという利点があるものの、食の情報についてはごく最低限の記述にとどまっていた。他方『美食のフランス』は、地方の名物料理や名店を具体的に紹介しながら、美しい風景や街の様子を描写した。これは現代の旅行ガイドブックの様式に近いものであるとともに、当時としてはツーリズムと美食探訪の共存が可能であることを具体的に示した例であると言える。つまり、この作品はツーリズムとガストロノミーを交差させ、旅行先の食文化を存分に味わい、楽しむことを提案した近代初の「美食ガイドブック」としても位置づけられるのである。

『美食のフランス』は「ガイドブック」という形式を用い、「地方主義」に基づく郷土料理の再発見というテーマを扱いながらも、きわめて現代的な旅行のスタイルを提案した稀有な作品である。読者層が限られていることや情報源の偏りなど問題点は散見しているものの、この作品によって地方発信の「地方主義」と外部の者から見た地方を示す「ツーリズム」とをつなぐ有用な道具としてのガストロノミーの姿が示唆された。